

上代における憑依表現の研究：「カムガカリ」を中心に

藤崎, 祐二

<https://hdl.handle.net/2324/4474907>

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名 : 藤崎祐二

論 文 名 : 上代における憑依表現の研究——「カムガカリ」を中心に——

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、『古事記』『日本書紀』における表現の多様性を明らかにし、上代文献資料の文学的達成を再評価することである。また、その成果に基づき、一貫した主張を有する個別の作品である『古事記』『日本書紀』の、独自性を追究することである。

そのために、文を構成する最小の単位である漢字の用法に着目する。漢字だけで書かれた資料を、編纂者が意図した通りの和語に読み替えることは困難であり、古今の諸注釈に継承された読みの中には、上代の用法に基づかない怪しげなものも散見するからである。これらの読みと語義を再検証することで、これまで見過ごされていた編纂者の意図を明らかにする。

そこで、現代語の「神がかり」に相当する「カムガカリ」という語に着目する。託宣における神々と人間との関係性は、王権の正統性を象徴し得るものであるから、政治色の濃い記紀においては、特に力点が置かれている可能性が高いからである。考察の具体的内容は、上代における「カムガカリ」の語義を明らかにすることと、憑依現象に関連する語、「託」・「著(着)」・「帰」・「憑」の読みと語義を明らかにすることである。「カムガカリ」の用例は、記紀のアメノイハヤの場面にそれぞれ一例ずつ見え、『古事記』は「神懸」と表記し、『日本書紀』は「顕神明之憑談」という文字列に、「カムガカリ」と読むべき訓注を添える。諸注釈は「託」・「著(着)」・「帰」・「憑」を「カムガカリ」の「カカル」と同義と見なし、「カカル」と読む傾向がある。しかし、字が異なるということは意味も異なる可能性があるため、これらの漢字を検証することで、憑依に関連する表現の多様性を追究するのである。そして、その成果に基づいて、神と人との関係性がどのように描かれているかを考察し、『古事記』と『日本書紀』の独自性を明らかにする。

第一章では、漢字「託」・「著(着)」を検証し、「ツク」と読むことと、強い付着を意味することを指摘する。「ツク」は対象にとりつく意味で使用され、現代語における「憑依する」の語義に最も近いと考えられる。また、「カムガカリ」の「カカル」は、「目の前にちらつく」などの意味で使用され、必ずしも直接接触れ合うことを意味しないことを指摘する。つまり、「カカル」よりも、「ツク」の方が憑依の意味で使用するのに相応しいと考えられる。

第二章では、第一章で検証した語の内、「託」の語義に特化して、さらなる考察を展開する。「託」を「とりつく」の意味で使用する例は漢籍には確認されず、日本独自の用法である可能性が窺われる。漢籍との相違を踏まえ、日本における「託」の語義を検証し、憑依現象を表現するのに相応しい語であることを論じる。

第三章では、『古事記』神功皇后の託宣に見える「帰」の読みと語義を検証し、和語「カカル」よりも和語「ヨル」との対応関係が顕著であることを指摘する。また、「ヨル」は接近を意味する語であり、憑依を意味する「託」・「著（着）」とは区別すべき可能性をも指摘する。

第四章では、崇神紀の倭迹迹日百襲姫の託宣における「憑」の読みと語義を検証し、「帰」と同様「ヨル」と読むべき語である可能性を論じる。また、対象への限らない接近を意味し、憑依そのものを意味する語ではないことを指摘する。

第五章では、「カムガカリ」の語義に関する考察を行う。上代における「カムガカリ」の用例は、記紀のアメノイハヤの場面にそれぞれ一例ずつ認められるだけなので、その語義を検証することは容易ではない。しかし、『万葉集』に見える「カカラズモ カカリモ神ノマニマニト」という表現は、「カムガカリ」の類例である可能性があるため、本章で取り上げて検証を試みる。

第六章では、『日本書紀』のアメノイハヤの場面における「顕神明之憑談」を手がかりとして、「カムガカリ」の語義を検証する。「顕神明之憑談」は、「カムガカリ」の具体的内容を示している可能性があることから、この文字列の内容に一致する場面を比較することで、「カムガカリ」の語義を考察する。

第七章では、作品の独自性に着目した考察を試みる。前章までに「託」・「著（着）」・「帰」・「憑」の読みと語義を分類した結果、上代文献資料の中で『古事記』だけが憑依を意味する「ツク」を一切使用していないことが明らかとなった。このような表現上の選択が、どのような意図に基づくのかを考察し、『古事記』の独自性を明らかにするための手がかりとする。

以上の考察を経て、『日本書紀』では親近性の低い強制的な憑依が描かれているがゆえに、執筆者によって「託」・「著（着）」が選択される傾向にあり、『古事記』はその逆であるために「託」・「著（着）」が選択されにくいという結論を導く。「カムガカリ」における当事者同士の親近性の高さは、『古事記』独自の傾向であることを指摘する。